

徳川家康の
人育て哲学



くお江への手紙
「庭訓状」よりく



徳川家康木座像
(県重文・大樹寺)

音澤深繁之澤
與韻同音故混
之數澤本半聲

貞觀政要 卷一
所通餽隋煬帝偏信虞世基而諸賊攻城剽邑亦不
而死得也剽音漂切也隋煬帝姓楊名廣文帝次子也
虞世基仕隋為內史侍郎世基以帝惡聞盜
賊告者皆不以實聞由是盜賊競起陷沒郡縣
皆弗之知煬帝後為宇文化及等所弑是故人
君兼聽納下則貴臣不得壅蔽而下情必得上通也

太宗甚善其言

范氏祖禹曰善哉太宗之間魏徵之對也可謂得
其要矣夫聖人以天下為耳目故聰明庸君以近
習為耳目故暗蔽明暗之分

惟在於遠近大小而已矣
唐氏仲友曰兼聽則公正忠讜進偏信則
浸潤庸受行此魏徵論聽納任用之本
愚按太宗問明君暗君魏徵謂兼聽者明偏信
者暗茲言固簡而當矣然兼聽偏信此自外至

中局出文子呂
覽等此類名物
之不熟見或揭
其略亦校離之
波及後放此

音常非通音字
書可見

貞觀十年太宗謂侍臣曰帝王之業草創與守成熟

難守成亦作尚書左僕射尚音常射音夜凡言尚書

重武官有主射以督課取其領事之號也唐制尚書
省置左右僕射掌統理六官為令之貳令闕則總省
事宰相房玄齡詳見任對曰天地草昧易屯卦象傳

草昧草昧也羣雄競起攻破乃降下江戰勝乃尅由此

言之草創為難魏徵對曰帝王之起必承衰亂覆彼

貞見文要

卷一 君道

徳川家康の「教科書」 『貞觀政要』

「唐」の国王「太宗」と家臣の
政治哲学に関する問答集

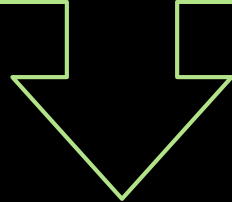
「創造」 「守成」

どちらが大変なのか

徳川創業家を存続させる意味

徳川家康は
何を心配していたのか

社会秩序の安定的な継続
国家大乱の再発



『武家諸法度』
役人（大名や武士）の倫理観と心得

持続可能な
平和社会存続のために
法による武士の支配
「武家諸法度」

金地院崇伝



武家諸法度

一 文武了馬之道事可相嗜事

尤文右武古之法也不可不足備矣了馬是武家之要紀也乎兵為凶器不得已而用之終不忘亂何不勵儆鍊乎

一 可制群飲佚遊事

令條取裁嚴制殊重耽好色業情矣是亡國之基也

一 肖法度輩不可隱置於國之事

法是礼節之本也以法破理以理不破法肖法之類其科不輕矣

一 國之大小名并請給人吾相拘士卒有為及逆殺害人告者速可追出事

夫挾野心之者覆國家之利器純人民之鋒劍也豈足允容乎

一 諸國居城雖為修補必可言上况新儀之稱當堅令停止事

城三百雉國之害也峻壘浚隍大亂本也

一 於隣國企新儀結徒黨者立之者早可致言上事

人皆有黨亦少違者是以或不順君父亦違乎隣里不守旧制何企新儀乎

一 私不可締婚姻事

武家諸法度

(元和令、崇伝の草案)

一、文武弓馬の道、専ら

相嗜むべき事。

文を左にし武を右にするは、
古の法也。

兼備せざるべからず、

弓馬は是れ武家の要枢也。

兵を号んで凶器となす、

已むを得ずして之を用ふ。

治に乱を忘れず、

何ぞ修鍊を励まざらんや。

一、背法度輩、

不可隠置於国々事

法之礼節本也、

以法破理、以理不破法、

背法之類、其科不輕矣



楠正成銅像

非は理に勝るあたわ
理は法に勝るあたわ
法は権に勝るあたわ
権は天に勝るあたわ
天は明らかにして私なし

非理法権天
成

徳川家の存続のために
竹千代と国松の跡目争い



長子を相続させる原則

家臣たちをどのように扱うのか
当主としてのリーダーシップとは

子育ての基本

国松が格別賢いのは生まれつきで、この上もなく満足なことです。あなたは、特に、国松をかわいがっておられるようですが、よくよく心して育ててください。幼い者が賢いといっても、そのまま育てば、一人前の年齢になった時、気ままな者になり、多くは親の言うことも聞かなくなるものです。

岡崎三郎信康肖像
(勝蓮寺/岡崎市)



わたしの長男の三郎信康が
生まれた時、わたしの年齢が
若くて子どもが珍しく、その
上、やせ細って弱々しい子で
した。そのため、無事に育っ
てくれることだけを願って、
気持ちが悪屈にならないよう
のんびり育てました。一人前
の年齢になってから、急にあ
れこれ教えても、幼いころの
しつけがきちんと行き届いて
いないので、親を敬うことさ
え知らず、かえって、教えさ
とす親を恨むようになったの
でした。



わがままを通して自分の願いが
望み通りになることは決してあり
ません

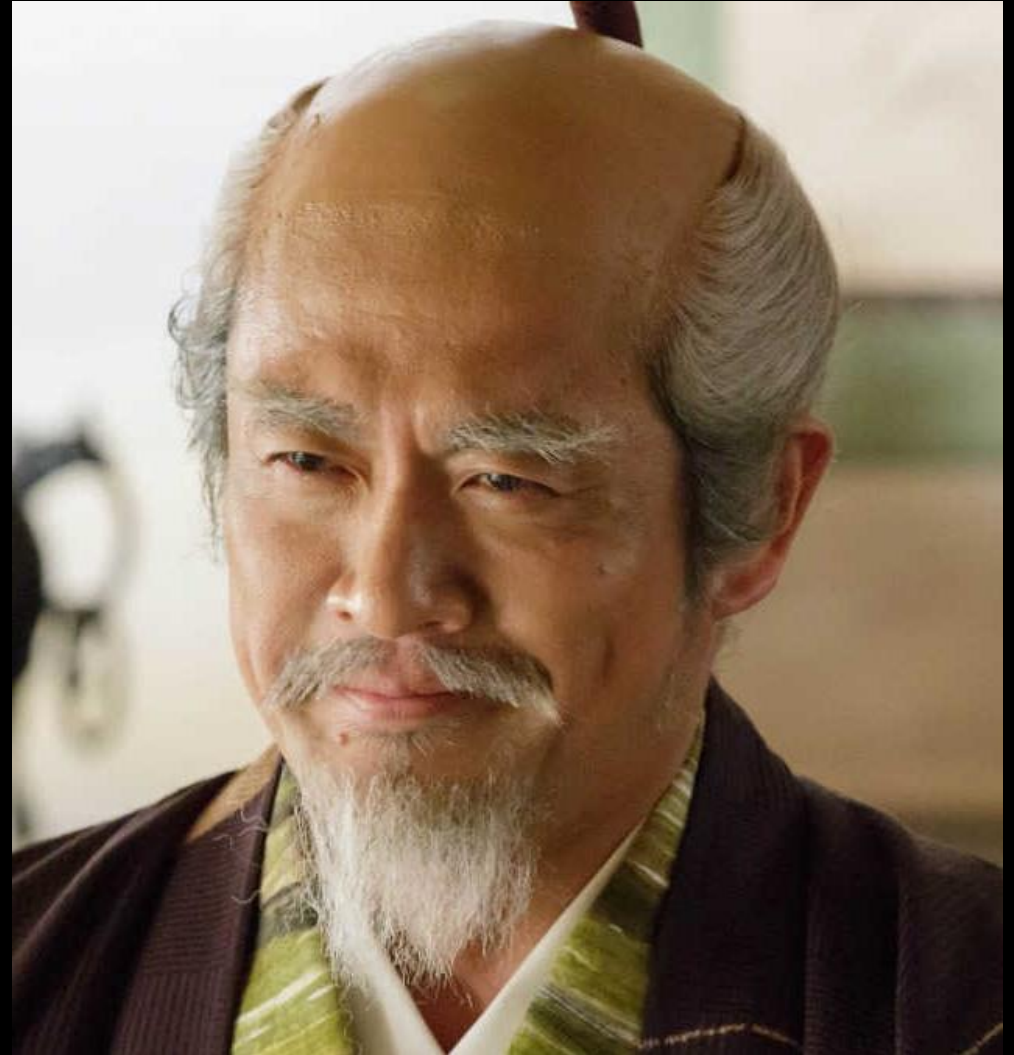
第一に、わがままな人は、親を
もつたいたないと思わず、また親か
らは見込がないとして見きりをつ
けられ、
第二に 親に遠ざけられ、
第三に 友達にきらわれ、
第四に 臣下・奉公人にきらわれ、
第五に 自分の願いごとはすべて
望み通りにならない。

右の五つのようになるものなの
で、仕舞いに自分を恨み、やがて
は何をするにも面倒で気が重くな
り、心が乱れて思慮を失うようにな
ります。

「幼いころから、物事は自分の思
い通りになるものではないことを
心せよ」

と言いたいです。

幼いころから、
物事は自分の思い通
りになるものではな
いことを心せよ。



リーダーとしてのの

心構え

主君たるものは仁徳のある者であるように心掛けることが第一に大切です。

尤も、臣下としては主に仕えることなので、主君のどのような無理も已む負えず聞き入れ、道理の外れている主君にも仕えてしまうのですが、これでは万一の場合役に立ちません。

臣は君の基と考えなくてはいいけません。臣下あつての大名なのです。



家臣は主君の基である。
君は仁徳を持ち、道理を
弁えることが大切。
社員あつての社長・組織
であることを決して忘れ
るな。

リーダーとしての資質

人として、仁・義・礼・知・信を守るばかりでなく、自分自身を写し見る鏡がなく、くでは、何事も分らないものです。それは、形ある鏡面をみがいて光沢を出す鏡のことではなく、自分の心を心でみがく鏡のことを言います。自身の行いが正しくなければ、心の鏡は曇ったまままで、照らすことがありません。曇らぬようにするには、常に我が身の行いについて、人から学びとる外はありません。

自分の都合のよいことばかりを聞くことが好きなら、へつらう人々は主人の好きなことばかり言うようになります。

主人の過ちや家中の不忠を聞くことを喜べば、不忠者は日に日に遠のいていきます。

忠告を時どき聞くことは天地の道にかなった行いです。



井伊直政像
(彦根市)



わたしには、井伊兵部少
輔直政という家臣がいま
す。直政は普段、言葉が
少なく、何事も人に言わ
せてだまっけて聞いており、
気分が沈み勝ちで引き立
たないように見えます。
しかし、何事も考えが決
まれば、直に意見を述べ
るのです。特に、皆の相
談違いか、ためにならな
い事は、人のいない所で、
物柔らかかに事の善悪を申
し述べるのです。それ故、
後には何事もまず、井伊
直政に内ないの相談をす
るようになりました。



仁・義・礼・智・信を
守りなさい。
リーダーとして自分の
心の鏡を磨くこと。
そのためには「他人の
言葉」を聞くこと、
「忠告」に耳を傾ける
ことが肝要。

堪忍とは

身を守る第一の要件は、堪え忍ぶことです。どんな武芸も堪え俤ぶことなくではできることではありません。天地自然の道理に適合するのは、

身の我儘をしない堪忍、地の理に適合するのは、先祖からの一郡一城を失わない堪忍、人の和を得るのも、自分の我儘を出さない堪忍、其のほか、全身で全てのことに堪忍することを心掛けたいものです。

堪忍の教え

臣下・奉公人のように仕える者や、民百姓の賞罰を正しく行ない、関係の深くない人にも情をかけ・身近な人も悪いことをすれば罰することこそ、**仁の堪忍**です。

君主に仕えて・自分の身命を顧みず、約束を破ることの**ないのは、義の堪忍**です。

人のことを先にして自分のことを後にし、朝起きてから夜寝るまで、行儀正しくするのは**礼の堪忍**です。

自分の心が増長しないようにしたり、他人をあなどり軽んずることをしないのは、**知の堪忍**です。

「堪忍」の大切さ

仁の堪忍	人を公正に評価する
義の堪忍	約束を破らない
礼の堪忍	礼儀正しく振舞う
智の堪忍	他人を軽んじない
信の堪忍	昔からの掟を守る

日本で、堪忍が完全に出来た人といえ、楠正成一人です。

織田信長殿は、現代に近い時代の名高い大将です。人もよく上手に使い、気が太く、知恵も勇気も優れた人です。しかし、堪忍することが七つ八つまで、辛抱しきれずに破れてしまうため、明智光秀による謀反も起こったのです。



織田信長肖像



豊臣秀吉銅像

豊臣秀吉公は、昔から今までの人の中で、極めて度量が広く、知恵もあり、勇気もあって、しんがしっかりした人でした。身分や地位の低い家に生まれました。二十十年の間に、全国を自分の政権下に治められたのも、そのような人柄であったからだと思います。しかし、あまり度量が広すぎて、分に応じた堪忍が破れたのです。

度量の広い事ほどよいこと
とはないけれども、それも
身の程を知らず、あらゆる
事に程度を超して華やかに、
身分以上の知行をあてがつ
たり、人に物を恵み与え過
ぎるのも、度量が広いとはい
えません。
自分自身が得意になりすぎ
たというぐさです。



「猿候促月図」 (長谷川等伯)

武士に支給する領地も人に
施す品物も、**その分**相応にす
るのが一番いいのです。ぜい
たくな心をもたず、物事を節
約し、常にその程を知ること
は、**正しい政道**であるといひ
ます。昔から、賢明な君主は、
相手の分に過ぎた物を与えた
り、すべての事を派手に行う
ことはなく、身に過ちのない
ようにし、
節約を心掛けています。



徳川家康像（岡崎城）

徳川家康木座像
(国重文・知恩院)



